

霞

- 2009年度春季展示室だより - 土浦市立博物館 平成21年5月16日発行 (通巻第7号)

土浦市立博物館では春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに実物資料の展示替えを行っています。本誌「霞(かすみ)」は、折々の展示資料の見どころをご紹介します。また、展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(7) 「真鍋小学校の観桜会」



目次

古写真・絵葉書にみる土浦(7)・・・1
博物館からのお知らせ・・・1
【2009年度春季の展示資料解説】
古代の錠前(古代)・・・2
「多賀谷祥聯書状」(中世)・・・3
土屋政直画「福祿寿之図」(近世)・・・4
霞ヶ浦四十八津掟書(近世)・・・5
機関紙『惜春』と菊田禎一郎(近代)・・・6
市史編さんだより・・・7
「霞」短信・・・8
コラム(7)博物館と中学生・・・8
情報ライブラリー更新状況・・・8

昭和12(1937)年頃に撮影された、真鍋小学校でのお花見風景です。桜は、明治40(1907)年の校舎移転新築記念に植樹されたもので、校地拡張により、校庭の中央に残る風景となりました。なごやかな雰囲気祝宴には、真鍋町長菊田禎一郎(前列左端)の姿も見られます。桜は「真鍋のサクラ」(県指定天然記念物)として、現在でも私達の目を楽しませてくれています。【情報ライブラリー検索キーワード「真鍋小学校の桜」】

博物館からのお知らせ

はたおり体験 6/6・6/13・6/20・6/27(いずれも土曜日) はたおり体験は予約が必要です。

館長講座 6/21・7/19・8/9・9/20(いずれも日曜日) 午後2時~ 講師 茂木雅博館長

文化財愛護の会写真展 5/20(水)~6/14(日) 会場 展示ホール・2階通路

拓本同好会作品展 6/17(水)~7/11(土) 会場 展示ホール・2階通路

夏休みファミリーミュージアム 7月22日(水)~8月30日(日)

テーマ展「書の達人 土浦藩士関家の人々」

土浦藩の書家関家の人々を、博物館が収集した書を通してご紹介する展覧会です。

博物館マスコット 亀城かめくん

無料開館日 国際博物館の日を記念して5月17日(日)は無料開館いたします。

いばらき kids club(いばらき子育て家庭優待制度)・漫遊いばらきファンクラブの特典が変わります。市立博物館に入館された方には、上高津貝塚ふるさと歴史の広場入館無料券プレゼント(広場に入館された方には博物館無料入館券をプレゼント)。ぜひご利用ください。



お知らせ欄の日程・内容は一部変更となる場合がございます。

じょうまえ
古代の錠前

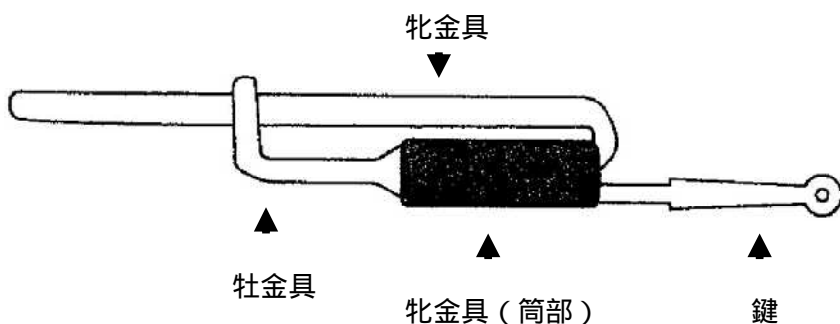
いしばしきた えびじょう
石橋北遺跡の海老錠

海老錠は、建物の扉口や、箱や櫃（被蓋のある大型の箱）の留め金に取り付ける古代以来の錠前です。その形から海老錠と呼ばれ、海老が尾を曲げた形の「牝金具」と、これに挿入される「牡金具」、それと錠を開放する「鍵」の三つのパーツからなっています。石橋北遺跡（土浦市田村・沖宿遺跡群）出土の海老錠は、鉄製の立方体をした牡金具の筒の部分で、10世紀前半頃のものと考えられています。筒部の長さは約5.5cmで、復原すると錠全体の長さは15cm前後あったかと想定されます。

鉄製の海老錠は、奈良の都平城京跡からも出土しており、奈良東大寺の正倉院には鉄製のほか、金銅製、銀製などの装飾豊かな海老錠も伝えられています。正倉院の海老錠の多くは、宝物が納められた箱や櫃などに取り付けたもので、錠の長さは10～10数cmであることから、石橋北遺跡出土品もその大きさから見て同様に箱や櫃類に使われた鑰子（錠前と鍵）の一部と考えられます。なお、『延喜式』によると、宮廷では錠を開放する鍵も、牛革の袋に入れて唐櫃に納められていたようで、厳しく管理されていた様子がうかがわれます。

海老錠が出土した石橋北遺跡は、霞ヶ浦土浦入りに面する台地上にあった奈良～平安時代（8～10世紀）の集落跡で、倉庫などに使われた掘立柱建物跡が50数棟も発見されています。この地が古代の茨城郡大津郷（津は港を意味する）に相当することから、内海の港に附設された物資の集積場所ではなかったかと考えられています。また、隣接する寺畑遺跡からは、四面に庇の付く仏堂と思しき建物跡や僧房と考えられる長屋風の建物跡なども発見されています。内海の港を拠点に、倉庫群や小規模な寺院を伴いながら、大津郷の中核的集落がこの地に形成されていたと考えられます。

箱や櫃は、古代から、官衙（役所）や社寺などで多様な品物の収納に使われてきました。なかでも、錠前と鍵を使用し封鎖するものは、正倉院の諸例が示すように、特別なもの、貴重品の類の収納に使われたと考えられます。石橋北遺跡の海老錠も、内海の港に運ばれてきた交易品や仏具など、遠来の貴重な品々と一緒に、収納保管に必要な道具として共に伝わったものではないかと思われます。（塩谷 修）



海老錠全体模式図（黒塗りが右写真の筒部）



石橋北遺跡出土の海老錠筒部

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を6/13（土）午後2時から開催いたします。



「多賀谷祥聯書状」国宝 上杉家文書(複製品)

- 佐竹義重、小田周辺の郷村を放火す

筑波山の南麓から桜川下流域を領地の基盤としてきた小田氏治は、幾度となく居城である小田城をめぐる佐竹氏と攻防を繰り返しています。なかでも永禄12(1569)年の攻防は領民をも巻き込んだ戦いとなりました。「多賀谷祥聯書状」は、下妻城主(下妻市)である祥聯(政経)が河田豊前守(長親)に宛てた書状で、永禄12年1月の戦の様子が記されています。河田長親は、上杉輝虎(謙信)の家臣で関東出兵時における味方武将との取り次ぎを務めていました。書状の中程には次のようなことが記されています。

「(佐竹)義重の小田への攻略は、正月十五日に海老嶋(海老ヶ島城、筑西市)を烈しく攻めて、十六日夜には全て攻め破り、本丸まで押し寄せました。すると、城主(平塚刑部)が頻りに降伏を願い出たので命を助け、私(政経)の所で人質を受け取って佐竹の陣営に渡し、こちらは無事に私(政経)の方で処理いたしました。そして二十一日には小田へ攻め入り、三村という地に陣を構え、宿(町)外張(城の前方15町付近迄の所)まで放火し、小田領の郷村を一つ残らず打ち破りました。数日陣を張って後、ひとまず(佐竹には)ご帰還していただきました。」

佐竹氏にとっては、何度も小田城を攻め取っておきながら、しばらくすると再び氏治が小田城を奪還してしまうことに業を煮やしたのか、この度の攻略では、小田城周辺を放火し、郷村までも散々に破壊してしまったようです。この書状と同様のことが「太田道誓(資正)書状」(山吉文書)にも見られ「小田工近陣、在々所々不残放火、府中(大掾資国)二モ御手合候、此度真壁方走廻無比類候、多賀谷修理亮(政経)儀モ同然」と記されています。この後、佐竹勢は謙信の関東出兵があるというので無理せず兵を引き上げています。氏治はこの時、城を出て近くの不動山(前山)に陣取っていたことが「長尾憲景書状」(歴代古案)に記されており、小田城は落城するまでにはいたりませんでした。

同年5月に越相同盟(上杉と北条の同盟)が成立し、謙信の関東出兵はなくなりましたが、同年10月に佐竹勢の大攻勢(手這坂の合戦)にあい小田城は落城してしまいます。翌年5月に梶原政景が小田城に入ると、以後氏治の小田城奪還はなくなり、戦国大名としての力を失うこととなったのです。

(中澤達也)



国宝 上杉家文書 「多賀谷祥聯書状」複製品
(原資料は米沢市上杉博物館所蔵)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を6/20(土)午後2時から開催いたします。



土屋政直画「福祿寿之図」

- 大名の自筆絵画 -

福祿寿は七福神しちふくじんの一人で、ふつう長い頭と豊かなひげが特徴の老人の姿で描かれます。幸福と財力と長寿の三つを兼ねそなえているというなんとありがたい神様ですから、七福神から独立して描かれることもよくあります。描線は省略され、上下左右に数回筆をふるっただけで描き上げたようですが、福祿寿の特徴がよく出ています。モノクロ写真ではお伝えできませんが、老人に寄り添う鶴の頭部にのみ用いた朱色がとても効果的です。わずかな朱色で画面全体がいきいきとし、印象深い出来映えとなっています。筆遣いの強弱で表現した衣の厚みは、この作者がなかなかの巧者こうしやであることを物語っています。

落款は「政直之印」で、この作者こそ土浦土屋家二代藩主政直（1641～1722）です。初代藩主数直かずなおの長子ちやうしとして誕生し、父の家督を継いで土浦城主となり、貞享4（1687）年老中に昇進して以後およそ30年間、幕閣ぼくかくの中樞ちゆうすうにあって四代の将軍に仕え、朝鮮外交など官僚としての責務を果たしました。政直の治世において土浦藩領は九万五千石に拡大、以後城下町が発展していくわけですから、土浦にとって大きな影響を及ぼした藩主といえましょう。

政直が茶の湯を楽しむ風雅の士でもあったことは、「政直数寄屋図」まさなおすきやず（「霞」第2号）でご紹介いたしました。小堀遠州こぼりえんしゆう（1579～1647）に限りない憧憬しやうけいを抱き、名物道具を多数所蔵していた大名茶人です。遠州ゆかりの茶道具を収集するだけでなく、さらに自分好みの道具も発注していました。遠州に盲従もうじゆうするだけでなく、自らの美意識を確立していた可能性が高いことがこれまでの博物館の調査研究でわかってきています。「福祿寿之図」も、政直が独自の画風を持っていたことを表しています。実は、政直自筆の書画はほとんど確認されていません。博物館には毎週のように全国から古美術のカタログが送られてきます。目を皿のようにして探しても、不思議なことに政直の自筆の書画は全く出てきません。書状や和歌卷子などの書は数点伝来していますが、自筆の絵画はこの作品が唯一です。

なぜ、政直の自筆の書画が少ないのか、風流かいらうを解し、長寿であった藩主の伝世品でんせいひんが少ないのは腑はらに落ちません。作品が無いことにも意味があるに違いないと思いつつも、いつか新たな政直の作品をこの場でご紹介できる日が来ることを心待ちにしています。

（木塚久仁子）



土屋政直画「福祿寿之図」

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を5 / 23（土）午後2時から開催いたします。



しじゅうはっつ おきてがき 霞ヶ浦四十八津掟書

- 文字に記された慣習 -

江戸時代初期の霞ヶ浦は、^{しじゅうはっつ}四十八津とよばれる村々の入会（一定地域の住民が漁場を共同用益すること）の湖でした。四十八津が成立した時期や経緯はよく分かっていません。ただし、中世の霞ヶ浦では、漁猟によって得た^{くまいりょう}供祭料を香取神宮にささげ、「津」（港）を拠点に水上交通を担った「^{かいふ}海夫」とよばれる人々の活動がみられました。四十八津はこの海夫につながる組織ではないかと推測されています。

四十八津の具体的な活動がわかる最初の史料は、^{けいあん}慶安3（1650）年の霞ヶ浦での漁法や漁期の取り決めや慣習を記した^{おきてがき}掟書（「^{あいさだめもろすれんぼんてがたのこと}相定申連判手形之事」）です。同年7月30日、村々の代表者が集まり、四十八津の会合が開かれました。これより以前、南岸の山内村（現美浦村）の者たちが、領主（^{はなもと}旗本）へ^{うみじょう}運上（税）を納めるためだとして、四十八津が禁止をする「あぐり網」をひく事件が起こっています。このことは霞ヶ浦を共同で管理し、自ら定めた漁法・漁期で漁業資源を守ってきた四十八津の村々の訴訟をよびおこしました。四十八津は山内村の領主へ漁をやめさせるように訴えましたが、聞き入れられなかったため、幕府に訴えをおこします。結局、四十八津の主張は幕府により認められ勝訴しています（史料の冒頭に、事件の経緯が記されています）。

事件後、「あぐり網」など特定の漁法の禁止・漁期の遵守・違反者の網や船の没収など、8項目の規定を確認したのが先の会合でした。これらの掟書は、幕府の関与のもとで作成され、各村の代表者は判を押して、^{てがた}手形（証文）としたわけです（なお、本史料には41ヶ村48名が連判をしています。現在の土浦市域にあたる村名はありませんが、のちの四十八津には百を超える村々が加入しており、^{おまじゆく}沖宿村・^た田村・^{おおいわた}大岩田村がみえます）。

掟書の作成により、霞ヶ浦を共同で利用する四十八津の入会慣行は、確固となったかにみえます。しかし、幕府という公の権威を裏づけに在地の慣習が明文化されたことは、四十八津が自ら定め守ってきた旧来の慣習を、自分たちでは維持していくことができない状況に陥っていたことを意味していました。この掟書が作られる以前、すでに霞ヶ浦の一部は幕府・水戸藩の^{おとめがわ}御留川（領主に運上を納めるための漁場で、特定の者にのみ漁猟が許された場所）とされ、湖すべてを入会とする四十八津の慣行はほころびを見せはじめていました。掟書がつくられた後も、四十八津と周辺の村々のあいだではたびたび争いが起きていきます（四十八津に属した大岩田村が、四十八津に属さない土浦城下の^{とうざき}東崎町と漁場をめぐる争ったこともありましたが）。慣習が文字に記された背景に、四十八津をとりまく情勢の変化をうかがうこともできます。（萩谷良太）



霞ヶ浦四十八津掟書「相定申連判手形之事」(当館所蔵、土浦市指定文化財、写真は複製品)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を6/6(土)午後2時から開催いたします。



機関紙『惜春』と菊田禎一郎

- 大正時代の真鍋 -

「惜春^{せきしゅん}」は春（青春時代）を惜しむというほかに、『詩経^{しきやう}』にある「新しきを生む」を意味する言葉です。真鍋町（土浦市真鍋）で「惜春会^{せきしゅんかい}」が進歩的思想をもつ青年たちにより、「憲政擁護、政界刷新、農村振興」を旗印^{はたじりし}として正式に発足したのは、大正12（1923）年11月3日のことでした。結成の背景には大正デモクラシーがあり、また基盤となったのは、明治時代中期の木田余^{きだまり}における天谷要平^{あまがいうへい}を中心とした農業改良運動と、明治末期に結成された真鍋青年団の活動でした。また、会の誕生には天谷丑之助^{あまがいうしのすけ}（土浦市第5・8・9代市長）と菊田禎一郎^{きくたていいちろう}（真鍋町第10代町長）の働きがありました。会の機関紙『惜春』の発行兼編集人をつとめた菊田禎一郎（1890～1964）は、創刊号の冒頭において、「惜春道の提唱」という次のような発刊の辞を述べています。

『惜春』生る。『惜春』生る。『惜春』そも、何をか語り、何をか唱えんとする。（中略）『惜春』の真精神は、人間生活の確実なる根柢を築き上げ、新しき生活を作りだすために、退廃、沈滞せる伝統と、一切の虚偽^{きよゑ}とを焼尽^{しょうじん}し、而かも自分自らの力に依って、更に権威ある創造を営むべく邁進^{まいしん}するにある。（後略）

自らの手で新しく文化を創造していくということ、文学的な筆で熱く語っています。禎一郎は、明治41（1908）年に土浦中学校を卒業しましたが、文学を志し、さらなる進学を希望していました。しかし祖父の反対にあい、家業の農業に従事したのです。同じように土浦中学校を出て、農業に従事する青年は少なくありませんでした。その中で向学心に燃えるものが、禎一郎のもとに集まったことも惜春会の発足につながっていました。

『惜春』はタブロイド版8ページで、創刊号は関東大震災直後の大正12（1923）年9月20日に発行されました。購読料は1部10銭。自由な論陣を張る方針であったため、広告はとりませんでした。掲載する論評は一般の評判もよく、演説会等も開催され、会員は千名近くとなります。しかし購読料は順調に入らなかったため、印刷費や郵送費の負担が大きくなり、大正13年4月28日発行の第6号が最後となりました。惜春会の活動も徐々に有名無実化しますが、「日本の農村の疲弊^{ひへい}を救うは、まず茨城の農村から、茨城の農村を救うは、まず真鍋から」という気迫をもち、農民文化の向上を目指した惜春会は、当時の青年たちに少なからず影響を与えたものと考えられます。（宮本礼子）



『惜春』創刊号

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を5/30（土）午後2時から開催いたします。



市史編さんだより

～ ～ ～ 沼尻墨僊の漢詩 西杖日記を中心に ～ ～ ～

第30回特別展でもご紹介したように、墨僊という人は今でいうマルチ人間、何にでも堪能な人でした。塾を経営して子供の教育に力を尽くす傍ら、天体観測や暦法、地図の作製なども手掛けていました。更に能筆家でもあり、和歌や漢詩も詠んでいます。漢詩の中には、退筆塚の裏面に彫られている「筑波山詩」という蔵頭蔵尾の詩や「土浦百韻歌」のような遊び心いっぱいの詩もあります。

今回は、伊勢から讃岐の金比羅山、大坂・京都・琵琶湖を経て中山道を通って土浦へ帰るまでの紀行文である「西杖日記」に記載されている漢詩を中心にお話してみたいと思います。

弘化2(1845)年4月、71歳の墨僊は、土浦町の商人河田(川田)庄三郎に誘われてはるばる伊勢への旅に出ます。旅立ちに当たって墨僊は「乙巳の初夏西雲に翔けんと欲して家郷を辞す」と題して七言律詩を詠みました。七言律詩というのは、一行7字ずつ8行から成り立っている詩です。

緑葉陰濃やかにして未だ鶺鴒を聴かず	清晨足を発して西辺に向かう
銭亀橋の畔桜水に嗽ぎ	高津草の頭筑巔を拝す
遮莫函山道路の難きを	預め怡ぶ樺浦に吟肩を翳やかす
憐れむべし鶴髪雞皮の老	孤筇に一任す万里の天 (読み下し分、以下同じ)

旧暦の4月ですから、もう若葉が濃く茂っている清らかな朝、西に向かって出発する、まだホトトギスの鳴き声は聴かない(帰るのを促されたりはしない)、桜川や筑波山に別れを告げて出発する、箱根山の険しい道など気にしない、和歌浦で詩を詠もうと今から楽しみだ、老人の私は杖を支えに遠い旅路に出掛けるのだ、というほどの意味でしょうか。旅立とうとする墨僊の意気込みが伝わってきますね。

道中の名所を過ぎる度に詩を詠んでいます、とても紹介し切れませんので、富士山の詩を一首。

崑崙華岳も亦顔無し	独り扶桑に秀ず富士の山
丹鼎誰か尋ねん徐福の迹	雪は清し碧落聰雲の間

これは七言絶句といって4行です。崑崙山も華岳も中国で靈峰といわれている山です。その山よりも日本の富士山は素晴らしい。立ち上る白煙は徐福が仙薬を煮ている煙だと言うが、確かめることは出来ない、青空にたなびくめでたい雲の上に真っ白な雪を頂いて聳えている、と富士山を称えています。

伊勢の旅館では、岡崎と金沢の医学生に詩を贈られて、墨僊の書が中国の王羲之のように素晴らしいと褒められ、鬢髻とした童顔の老人だと詠まれています。勿論墨僊もそれに対してお返しの詩を贈っています。漢詩は必ず韻を踏んで作りますが、お返しの詩を作るときは、贈ってくれた人の詩と同じ韻を使って作るのが普通ですので、墨僊もちゃんとそのようにしています。そして二人に対して優秀な医者だと褒めた詩をお返ししています。これを見ても墨僊が博識で教養があったことが分かるでしょう。この後墨僊は伊勢の射和にある国分家(土浦の亀甲大の本家)に逗留し、そこから和歌浦、讃岐の金比羅山などを経て大坂、京都を見物、琵琶湖舟遊して近江八景などを詠み込んだ長詩を載せています。帰路は中山道を通って7月11日に家に帰り着きました。さすがに長旅で疲れ家に帰ってホッとしたのでしょうか、律詩と絶句と二首詠んでいます。その内の絶句をご紹介しますので終りにいたしましょう。

百日の雲遊玉泉を餐し	帰り来れば窓外復塵煙
塵煙管せず肱を支える処	夢は驚す江山万里の天

3ヶ月の間普段の俗事を離れて清遊して来たが、帰ってきて又世間のことに煩わされる、でもそんなことは忘れて、旅してきた山河の風景に思いを馳せている。やはり墨僊にとって71歳にもなった伊勢への旅は忘れがたい強い印象を残したようです。

菅井和子(市史編さん係非常勤職員)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は「土浦市拓本同好会」の設立と拓本へ寄せる思いについて、会員の今野和男さんにご紹介いただきます。

土浦市拓本同好会について

博物館と土浦市文化財愛護の会による「土浦の句碑・歌碑めぐり」が平成 11 年 2 月に実施されました。真鍋の善応寺から小松の二十三夜尊までの 6ヶ所を、一日をかけてゆっくりと説明を聞きながらめぐる勉強会でした。同年 6 月には拓本入門講座(5日間)を受講、拓本の種類・必要用具類・タンポ作り・採拓時のルールなどの説明を受けました。初めての採拓は土浦市川口町のモール 505にある句碑・歌碑で、全員が夢中で紙にむかってタンポに墨をつけ、叩いたものでした。

実技が終了した段階で、「このまま解散するのももったいない」との声があがり、7月に土浦市拓本同好会が13名で結成され、活動を続けることになりました。4年後の平成 15 年 3 月には「土浦市拓本同好会作品展」を博物館で開催することとなり、裏打ち・表装掛軸など各自が作製した大小 13 点の作品を展示することができました。句碑・歌碑の文字は、万葉がなから古い文字のくずし字など難しいものが多いのですが、幸い博物館内には古文書の勉強会があり、大いに助けられました。

佐渡に旅した時、相川から小木に向かう途中の羽茂町に長塚節研究会があることを知りました。役場に寄りましたがよく知っている方はなく、伝え聞いた細い山道を車を走らせ、どうにか4ヶ所に自筆の文学碑を見つけました。長塚節の佐渡旅行は明治 39 年夏のこと。両津に渡る船中で博労と出会い、「島の人の心に優しい処がある」ことに感動して、紀行文が作られたとの伝えがあります。旅先で採拓した作品は思い出がつまっております。大切に保存しています。

今野和男(土浦市拓本同好会会員)

土浦市拓本同好会作品展は 6 / 17 (水) ~ 7 / 11 (土) です。ぜひご来場ください。

コラム(7) 博物館と中学生

特別展「沼尻墨僊 城下町の教育者」に際して「墨僊の書をお手本に文字を書(描)いてみよう!」を企画しました。これは市内の中学 1・2 年生に、墨僊の漢詩の文字を、自由な組合せと好みの筆記具で書いてもらおうというものでした。中学生を対象にした一番の理由は、博物館に関心を持ってほしかったためです。小学生の時には校外学習で一度は興味をもっていただく機会があります。しかし中学生になると、親子はもちろん友達同士での来館も少なくなり、博物館の存在は残念ながら希薄なものになってしまうようです。

関心の糸が途切れるのは残念なこと。そこで応募しやすい方法を試行錯誤し参加を呼びかけたところ、なんと 1500 点を超える作品が集まりました。学校側の協力が大きかったのはもちろんですが、中学生の反応があったことは何よりうれしいことでした。応募作品はすべて展示し、複数で入館できるパスポートも参加賞に加えしました。が、偶然訪れた保護者がわが子の作品に驚くなんてことも。実際に足を運んでもらうことは簡単ではありませんでしたが、少なくとも墨僊の名を知る機会にはなったと思います。身近な歴史や文化への興味関心の芽を枯らさない工夫、これも博物館の大事な役割と感じています。(宮本礼子)

情報ライブラリー更新状況

【2009・5・15 現在の登録数】

古写真 416 点(+5)

絵葉書 313 点(+7)

()内は 2009 年 1 月 5 日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1 ページでご紹介した古写真もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2009 年度
春季展示室だより(通巻第 7 号)
編集・発行 土浦市立博物館
茨城県土浦市中央 1-15-18
TEL 029-824-2928
FAX 029-824-9423
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

2009 年度夏季展示は 2009 年 7 月 1 日(水)~9 月下旬となります。「霞」2009 年度夏季展示室だより(通巻第 8 号)は 7 月 1 日(水)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。